

各がんの登録状況からみた 評価のまとめ

肺がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約1割減少している。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が53.4%で、対策型検診を行う5がんのうち最も低い。
- 5年相対生存率は、限局では80.1%であるが、領域では30.4%に減少しており、検診の受診控えが進行がんの増加に至る場合は、死亡統計への影響も懸念される。

胃がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、直近10年間に約4割減少し、がん対策推進計画が2割減を全体目標とする中で、減少幅が大きい。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が78.0%で他のがんに比べて高い。
- 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。

大腸がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に横ばいで推移している。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が61.0%で、胃がんや肝がんの70%台と比べて低く、検診の受診控えにより、一層の低下が懸念される。
- 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。

肝がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約半減したが、未だ全国を上回っている。
- 発見経緯(2016～2018)は、他疾患の経過観察中が50.9%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は8.7%で最も低い。
- 進行度(2016～2018)は、限局が58.8%で、胃がんや大腸がんに比べ高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%で、これらのがんに比べ低い。
- 肝炎対策推進計画に基づく施策を推進する必要がある。

乳がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、2017年以降増加しており、全国を2.5ポイント上回る。
- 5年相対生存率は、限局98.9%、領域92.7%であり、いずれも90%を超えている。
- 発見経緯(2016～2018)は、検診等が35.8%で他のがんに比べて高いが、自覚症状等も48.4%ある。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、自覚症状等で発見されたうち限局が51.2%で、他のがんに比べ高いことから、検診の定期受診だけでなくブレスト・アウェアネス(乳房を意識する生活習慣)の啓発普及に努める必要がある。

子宮頸がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、年毎に増減はあるが長期的に横ばいで推移している。
- 年齢階級別罹患数は、上皮内がんを含む場合は30代後半がピークであることから、若年層への検診受診勧奨を強化する必要がある。
- 上皮内がんを含む発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち上皮内がん及び限局が9割を占めるのに対し、自覚症状等ではこれらが6割にとどまる。
- 5年相対生存率は、限局が98.5%であるが、領域では72.0%に減少しており、早期発見が重要である。

各がんの登録状況からみた 評価のまとめ

肺がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約1割減少している。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が53.4%で、対策型検診を行う5がんのうち最も低い。
- 5年相対生存率は、限局では80.1%であるが、領域では30.4%に減少しており、検診の受診控えが進行がんの増加に至る場合は、死亡統計への影響も懸念される。

胃がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、直近10年間に約4割減少し、がん対策推進計画が2割減を全体目標とする中で、減少幅が大きい。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が78.0%で他のがんに比べて高い。
- 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。

大腸がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に横ばいで推移している。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が61.0%で、胃がんや肝がんの70%台と比べて低く、検診の受診控えにより、一層の低下が懸念される。
- 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。

肝がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約半減したが、未だ全国を上回っている。
- 発見経緯(2016～2018)は、他疾患の経過観察中が50.9%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は8.7%で最も低い。
- 進行度(2016～2018)は、限局が58.8%で、胃がんや大腸がんに比べ高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%で、これらのがんに比べ低い。
- 肝炎対策推進計画に基づく施策を推進する必要がある。

乳がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、2017年以降増加しており、全国を2.5ポイント上回る。
- 5年相対生存率は、限局98.9%、領域92.7%であり、いずれも90%を超えている。
- 発見経緯(2016～2018)は、検診等が35.8%で他のがんに比べて高いが、自覚症状等も48.4%ある。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、自覚症状等で発見されたうち限局が51.2%で、他のがんに比べ高いことから、検診の定期受診だけでなくブレスト・アウェアネス(乳房を意識する生活習慣)の啓発普及に努める必要がある。

子宮頸がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、年毎に増減はあるが長期的に横ばいで推移している。
- 年齢階級別罹患数は、上皮内がんを含む場合は30代後半がピークであることから、若年層への検診受診勧奨を強化する必要がある。
- 上皮内がんを含む発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち上皮内がん及び限局が9割を占めるのに対し、自覚症状等ではこれらが6割にとどまる。
- 5年相対生存率は、限局が98.5%であるが、領域では72.0%に減少しており、早期発見が重要である。

各がんの登録状況からみた 評価のまとめ

肺がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約1割減少している。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が53.4%で、対策型検診を行う5がんのうち最も低い。
- 5年相対生存率は、限局では80.1%であるが、領域では30.4%に減少しており、検診の受診控えが進行がんの増加に至る場合は、死亡統計への影響も懸念される。

胃がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、直近10年間に約4割減少し、がん対策推進計画が2割減を全体目標とする中で、減少幅が大きい。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が78.0%で他のがんに比べて高い。
- 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。

大腸がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に横ばいで推移している。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち限局が61.0%で、胃がんや肝がんの70%台と比べて低く、検診の受診控えにより、一層の低下が懸念される。
- 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。

肝がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約半減したが、未だ全国を上回っている。
- 発見経緯(2016～2018)は、他疾患の経過観察中が50.9%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は8.7%で最も低い。
- 進行度(2016～2018)は、限局が58.8%で、胃がんや大腸がんに比べ高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%で、これらのがんに比べ低い。
- 肝炎対策推進計画に基づく施策を推進する必要がある。

乳がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、2017年以降増加しており、全国を2.5ポイント上回る。
- 5年相対生存率は、限局98.9%、領域92.7%であり、いずれも90%を超えている。
- 発見経緯(2016～2018)は、検診等が35.8%で他のがんに比べて高いが、自覚症状等も48.4%ある。
- 発見経緯別の進行度(2016～2018)は、自覚症状等で発見されたうち限局が51.2%で、他のがんに比べ高いことから、検診の定期受診だけでなくブレスト・アウェアネス(乳房を意識する生活習慣)の啓発普及に努める必要がある。

子宮頸がん

- 75歳未満年齢調整死亡率は、年毎に増減はあるが長期的に横ばいで推移している。
- 年齢階級別罹患数は、上皮内がんを含む場合は30代後半がピークであることから、若年層への検診受診勧奨を強化する必要がある。
- 上皮内がんを含む発見経緯別の進行度(2016～2018)は、検診等で発見されたうち上皮内がん及び限局が9割を占めるのに対し、自覚症状等ではこれらが6割にとどまる。
- 5年相対生存率は、限局が98.5%であるが、領域では72.0%に減少しており、早期発見が重要である。